

## 東京大学国語研究室蔵『仮名論語』について（一）

柳原 恵津子

### 一、本資料について

『仮名書き法華経』『仮名書き論語』など漢籍・仏典等を仮名書きした資料群は、部分的ではない逐字的な漢文訓読法を知ることができ、また漢語類の発音・表記、音便をはじめとした日本語の音韻を仮名で示してくれるなど、日本語史のある一部分を考える上で欠かすことのできない役割を持つものとして広く用いられてきた。

このうち安田文庫旧蔵『かながきろんご』の名で知られる文献については、漢籍を仮名書きした貴重な資料として広く知られているにも関わらず、原本は多くの安田文庫の資料類とともに、おそらく太平洋戦争末期の空襲によって塵灰と化してしまったものと想像されており、今日では『安田文庫叢刊』（昭和十年）におさめられた川瀬一馬氏による翻刻をもって読み継がれている。川瀬氏による翻刻は私が言うまでもなく信頼に値するもので、このような国語学的

に重要な文献が早いうちに氏によって紹介されたからこそ今日もなおこの文献の概要をうかがい知る事ができるということはまさに幸運だといえる。更に氏はこの翻刻の冒頭に八葉の文献写真をも載せており、一部ながら本資料の体裁を確認することができるのである。

しかしこのような形で本文献に触れているからこそ、是非ともこの文献について知ることのできる更なる手段はないかと求めたいところであろう。筆者はその一助となりうる文献として、東京大学国語研究室所蔵の『仮名論語』を紹介したい。

この『仮名論語』は、安田文庫旧蔵の『かながきろんご』の原本を、明治四十三年に影写したものである。奥書を見ると「謄写 阪部梁文、校合 橋本進吉」とあり、橋本進吉博士の指示・校合のもとで作成されたものだということ

ことが知られる。

体裁は和装本、原本と同じく三分冊で、川瀬氏の書誌解説で知られたとおりの体裁をとっている。

本文を先にあげた『安田文庫叢刊』所収の原本の写真と対照してみても、相当程度（傍書・抹消などはもとより、筆の太さや、筆のとぎれ目にいたるまで）原本に忠実に記しており、焼失したと思われる原本のほぼ全貌を知ることができる資料と言つて差し支えない。

以下、この東京大学国語研究室本『仮名論語』の第一分冊・第三分冊の翻刻をおこなう。

なお、本資料は『かながきろんご』の名で広く知られているが、この名は本資料中には見られず、扉等には「ろんご写本」「論語古写本」などと記されており、謄写時のものと思われる題簽に『仮名論語』とあることを申し添える。

## 二、書誌的事項

まず、本資料に関する書誌的事項を記しておきたい。

本資料の体裁は袋綴装、三分冊である。川瀬氏による原本の解題には、この三分冊のうちの第一冊・第二冊は室町中期の写本、第三冊はこの室町期の写本をもとに江戸期に作られた副本で、正本副本ともに一部のみが伝わった不完全な伝本とあるが、東大国語研究室もこの体裁を忠実に

再現したものと思われる作りで、第一冊・第三冊と第二冊の間には筆致・一丁当たりの行数・一行当たりの文字数などの面で差異が見られる。また川瀬氏の述べる

第一冊 雍也第六の第二十四章から子罕第九の第五章まで

第二冊 郷党第十の第八章から同篇末まで

季氏第十六の第一章の半から同章末まで

子路第十三冒頭から第九章の半まで

衛靈公第十五の第五章から第十二章まで

第三冊 先進第十一冒頭から陽貨第十七の七章まで

という各冊の内容も安田文庫旧蔵本とほぼ同じである。ただこの翻刻に付された原文を見るに、正しくは

第一冊 雍也第六の第二十四章から子罕第九の第五章の半まで

半まで

第二冊 郷党第十の第八章から同篇末まで

季氏第十六の第一章の半から第二章の半まで

子路第十三冒頭から第十四章の半まで

衛靈公第十五の第五章から第十二章まで

第三冊 先進第十一冒頭から陽貨第十七第一三章の半まで

で

であり、この差異がなにによるものかは判然としない。

各冊とも料紙は薄斐紙を用い、間に楮紙を挟み二つ折りにした上で綴じている(五六)。

大きさは縦35・5cm×横23・4cmの美濃判、明治末期(おそらく騰写時のものである)の薄茶地無文表紙に同じく明治末期頃の題簽が添えられ、これに『仮名論語』とある。また各冊の背には「仮名論語 共三冊」の文字がある。

なお各冊表紙に東大国語研究室の請求記号を記したラベルが貼付されており、「国語研究室/第3棚/第4号/第1冊(孫番号)」の如くが記されている。それを見ると川瀬氏のいう第一冊に「1」、第二冊に「3」、第三冊に「2」との孫番号が記されている。これは川瀬氏のいう第二冊が全く前後脈絡のない断片の寄せ集めのような体裁だからかと思われる。筆致の一致(あるいは正本副本)という面から言えばやはり川瀬氏の番号の振り方がなお有効であるが、しかし本稿ではひとまず東大本のラベルに習い、川瀬氏翻刻の第二冊を第三冊、川瀬氏翻刻の第三冊を第二冊、と呼ぶことにする(他に表紙にラベルは2種、都合3種貼付されている。表紙右上部のラベルには「東京帝国大学附属図書館/No152385」、右中央よりやや下には「東京帝国大学文学部/No152385」、右中央よりやや下には「東京帝国大学文学部/No152385」とあり、これら

二つは明治期末のもの、上記した請求記号のラベルは右下にあり、これは戦後のものと思われる)。

### 三、凡例

#### (1) 本文の表記について

・ 本稿では東大国語研究室本『仮名論語』全三冊のうち、第一冊および第二冊を翻刻する。なるべく元の姿に忠実であることを旨とし、ページや行の区切りを原本の通りに示した。

・ ただし巻末の書写奥書は、一行の字数が多いという都合上原本通りの改行がかなわなかった。そこで奥書についてのみ改行部分を「」で記すこととした。

・ 原本で漢字の部分は漢字のまま、仮名の部分は仮名のまま表記した。漢字は全て新字体を使用し、仮名や疊符に付された濁点の有無も、原本のままに記した。

・ 本文中の漢字に振り仮名が記されている場合にはこれも忠実に記した。

・ 本文中のある部分の右側にいわゆる傍書がなされている部分も多く見られる。このような箇所については実際に傍書がなされている箇所には傍書の記事も記した。

・ 本文中小さな「○」印を挿入符として用い、その近

くの余白に挿入すべき字句が記されている箇所も多くみられる。そのような箇所については「○(〜)」のような記号を用いて、挿入すべき字句を本文中に記した。

・行頭部に小字で書かれた頭書については「小書き頭書」のように頭書部分を鉤括弧で囲って記した。

・紙幅の関係で行末部分が左傍に記されているような箇所については、同じように行末部分の左傍に記すよう努めた。

## (2) 貼紙の表記について

・本資料は処々に貼紙がみられる。貼紙に記された記事については、その記事の冒頭部に「(貼紙)」とし、るしてから本文を記し、その記事の末尾には「(貼紙終)」と記した。

## (3) 注記について

・存疑の部分等、翻刻する上で注記が必要となった箇所については当該部分の本文中に「※」「※」のように印を施し、その丁の末尾に注記を記した。

## (4) 抹消部分・空白部分等の表記について

・本文中抹消された部分については、消された部分

が判読可能な部分については「[...]」でくくってこれを出来るだけ示した。判読不可能な部分については「■」で記した。

・本文中空白となっている部分については当該個所に「□」を示し、本文の脱文が想定されるか、などの注記を適宜を施した。

・重書された部分については、下に記された字が解読可能な場合には、下に書かれた字句を注記欄に記した。下に書かれた字が判読不能場合には特に注記はほどこさなかった。

・判読不可能な字句は「●」で記した。

・論語原文に存する字句がかな書きされず省かれているという箇所がごく稀であるが見られる。そのような箇所については、そのつど注記を施した。

## (5) 紙の区切れ目について

・本資料の原本の形態は、第一分冊は元来綴本であったものが後に卷子本に改められたもので、第二分冊はもとより卷子本であったものようである。

このため、謄写に際し、第一分冊は実際の紙の切れ目に合わせて紙を使用し、実際の折り目跡の部分で二つに折って綴じており、これに対し紙幅のまちまちな第二分冊については、紙の区切れ目ま

では再現せずに、実際の境目に縦線を引くことでこれを示している。本稿ではこの第二分冊に記された紙の区切れ目を、「二」で記した。

(6) 篇・章の区切れについて

・各篇・章の境目に「一」で印を施し、その境目の行末尾に篇の名称・章の番号を川瀬氏の翻刻に添えられた原文に基づいて記した。

四、本文

〔第一冊〕

〈二才〉

(朱印) 「東京帝国大学図書印」

〈二ウ〉

(朱印) 「文彦」

ろんご写本

△印

二本の中

(貼紙)

このまきに

やうやてい六の末より

しかんてい九の

きやうひとそれわれを まであり

おくがきなし

(貼紙終)

〈三才〉

(本紙上部朱割印) 「東京帝国大学図書印」

『はくじんしやにたとひつげていはく (雍也第六、二四)

井にじんしやありといは それ

したかはんやし のゝたふまくなん

すれぞそれしからんくんしは

ゆかしむべしおちらしむ

へからずあざむくべししう

べからず『しのゝたふまくんしは

ひろくぶんをまんでやくする

にれいをもつてす又もつて

(二五)

〈三ウ〉

そむかざるべし『しなんしを

見るしろよろこびずふうしちかつ

てのたふまくわれすまじきところ

をせば天ふさがん／＼『しのゝたふまく

中庸ちゆうゆうのとくたる事【おもそれ】いたれ

るかなたみすくなひ事久し

『しこうがいわくもしよくひろくたみに

ほどこしてよくしうをすくはゞいかん

じんといふ〇〇しやしのゝたふまくなんぞ

〈四オ〉

じんをしもことゝせんかならずせい

げうしゆんもそれ〇なをやめりそれじん

しやはをのれたゝんとほつして

人をたつをのれたつせんとほつして

人をたつすよくちかくたとへをとる

じん〇のみちといふべからくのみ

『じゆつじてい七

〔小書き頭書〕しのゝたふまく

のへてさくせすしんしていに

しへをこのむひそかにわれを

らうはうにひす『しのゝたふ

(二六)

〈四ウ〉

まくもだしてしるまなんで

いとはず人をおしへてうむまず

なんぞわれにあるや『しのゝた

ふまくとくをおさめずかくを

かうぜずきをきいてしたがふ

事あたはず〇よからざるをあらたむる事あたはずこれわがうれへ

なり『しのゝんきよせるときに

しん／＼じよたりよう／＼

じよたり『しのたふまくはなは

(二八)

(四)

(五)

〈五オ〉

だしひかなわがをとろへたる事

久ひさしいかなわが又ゆめにしう

こうを見ざる事『〇しのゝたふまくみちをねかひ

とくによりじんによりげいにあそ

ぶ『しのゝたふまくみづからそくしう

いしやうをおこなつつるときんはわれ

いまだむかしより■しうる事をなくんば

【なくんば】あらず『しのゝたふまくふんせすん

はけいせず ひせすんばはつせすひとつ

すみをあげてしめすにみつ

〈述而第七、一〉

(七)

(八)

(二)

〈五ウ〉

のすみをもつてはんせすんばすな

はちわれ■またせず『しもある人の■かた

はらにしよくしつるときんばいまだ

むかしよりあくまでにせずし

此日にしてこくしつるときんば

すなはちうたうたはず『し

がんねんにかたつてのたふまくもち

あるときんばすなはちおこなふすつる

ときんば■すなはちかくるたゞわれ

となんぢとこれあるかなしろがいわ

くしさん三くんをおこなはんときんば

〈六オ〉

二小書き頭書 すなはち

たれとともにかせんしのゝたふまくほう

こへうかしてしぬともくゑなからん

ものにはわれはくみせじかならず事

にのぞんでおそりはかり事を

このんでなさん物也『しのゝたふまく

とみしかもとめづへくんばしつへん

のしといふともわれまたせんもしもとむ

(九)

べか■らずんばわがこのむどころにしたが

はん『しのつゝしむところはさいせんしつ

『しせいにしてせうがくをきいて

三づつしゝのあぢはいをしらず

のたふまくはからざりきがくをおこ

〈六ウ〉

す事のこゝにいたんなんといふ

ことを『ぜんゆうがいはくふうしゑ〇(じ)のき

みをたすけんやしこうがいわくだく

われまさにとはんとすいつていわく

はく(※)いしくせいはなんびとぞしのゝたふ

まくいにしへのけんじんなりいわくうら

みありきやのたふまくじんをもとめて

じんをえたり又なんのうらみかあらん

やいでゝいはくふうしはたらんず

『しのゝたふまくそしをくらしい水を

のみひじをまげて枕にし

※この「く」「い」のうえに重書せり

(一一)

〈七オ〉

てたのしむふ事又そのなかにあり

(一二)

(一三)

(一四)

(一五)

ふぎにしてとみ又たつときはわれ

におゐてうかめる雲のごとし『しのゝたふ

まくわれにすうねんをくはへて

五十にしてもつてやくゑきをまな

びばもつておほみなるあやまち

なかるべし』しのまさしくいふところ

はししよしつれいをみなまさし

くいふ『せうこうこうしをしるに

とふしるこたへずしのゝたふまく

〈七ウ〉

なんぢなんぞいはぎつつる

それ人となりいきどをりを

おこししよくをわするたのし

みこれをもつてうれへを

わすれたるおひのまさ

いたんなんとする事をしらずと

しかいふならん』しのゝたふまく

われむまれなからにしてしれるもの

にはあらずいにしへをこのんで

(二六)

『しくわいりよくらんしんかたらず

』しのゝたふまくわれ三じんおこなつ

つるときんはかならずわがしを

うそのよきものをゑらんでした

がふそのよからざるものをばし

かもあらたむ』しのゝたふまく天とく

をわれになせりくはんたいそれ

われをいかんがせん』しのゝたふまく

じさんしわれをもつて

(二二)

(二三)

〈八ウ〉

しにかくせりとするかわれなん

だちにかくす事なしわれ

おこなふとしてじさんしとともに

せずといふ事なきはこれきう

也』しよつをもゆしてておこなふぶん

かうちうしんしのゝたふまくせい人

をばわれえて見ずなんぬ見る

事えてはくんしをだもこれか

也』しのゝたふまくせんせじんをばわれ

(一九)

(二四)

(二五)

〈八オ〉

びんにしてもとめたるものなり

※この「ゆして」三字存疑。

※この「ん」字「い」の誤か。



〈九オ〉

えて見ずなんぬ見る事えては

つねある人をだもこれか也なけれ

どもありとすむなしけれども

みてりとすせばしけれどもゆたか

なりとすかたかなつねある事』し

てうすれどもかうせずよくすれ

どもねとりをゐず』しのゝたふまく

あらんしらずしてさくせ<sup>す</sup>るものわれ

これなしおほくきいてそのよき

ものをえらんでしたがふおほく

※この「せ」字存疑。

〈九ウ〉

見てしるはしるがつぎ也』こき

やうともにいふ事かたしとうし

まみゆもんじんまどひぬしのゝ

たふまくそのすゝまんにはくみせん

そのし(※)りぞかんには【ふせん】た(※)ゞ

なんぞはなはだしき人

(二八)

をのれをいさぎよふしてもつて  
すゝまはそのいさぎよきには

くみせんそのいんじをばやす  
んぜじ』しのゝたふまくじん

(二九)

※1 この「し」字存疑。

(二六)

※2 傍書「くみせし」は「くみせじ」の誤ならん

(二七)

〈一〇オ〉

とをかれやわれじんをほつ

すればこゝにしんいたる『ちん

しはいとはくせうこうれいを

しれりやこうしこたへてのたふ

まくれいをしれりこうし

しりぞきぬぶばきをいつし

てすゝんでいわくわれきくくん

しはたうせず(※)きみごにめ

とれりとうせいなるがために

【これを】ごまうしといふきみ

(三〇)

※ この間「君子亦党乎」五字分の本文無し。

〈一〇ウ〉

しかもれいをしければたれかれ  
いをしらざらんふばきもつて  
まうすしのゝたふまくきうさい

はへありいやしくもあやまちあ  
ろ(※)ときんば人かならずしる

『しと人とうたうたふ時にしてよき  
ときんばかならずかへさし

めてのちにくわす』しのゝたふ  
まくぶんはくなる事

※ この「る」字「る」の誤ならん

へ一オ

われなを人のごとし【み】に

くんしをおこなふときんば〇すなはちわれ

いまたうる事あらず』しのたふ

まくもしせい(※一)とじんとには

〇すなはちわれあに(※二)あえんやそも／まな

んでいとはず人をおしへて

うますすなはちしかいふといふべ

からくのみこうせいくはがいまくま

したゝていしまなふ事のあた

はず』しのやまひへいなりしろ

(三三)

へ二オ

はちやうせき／たり』し

おんにしてはげしいあつてたけ

からずけうにしてやすし

たいはくてい八

しのゝふまくた〇(〇)はくをばそれし

とくといふべからくのみみたび

(三七)

(泰伯第八、一)

(三一)

へ一ウ

いのらんとこふしのゝたふまく

ありやしるこたへていわくあり

るいにいはいくしやうかしんきにたう

じすといへりしのゝたふまく

きうがいのる事久し』しのゝたふ

まくおごりはすなはちいふそん

なりけんはすなはちいやし

そのふそんなるよりはむしろ

いやしかれ』しのゝたふまくくん

しはたんたう／たり小じん

(三二)

(三五)

(三六)

天かをもつてゆづるたみえて  
せうずる事なし』しのゝたふまく  
けうにしてれいなぎときんば  
すなはちらうすつゝしんで

(二)

やまひありまうけいしとぶらま  
そうし【いっていわくかいわく】とりのまぎにしな  
んとするとき【はは】そのなくことかな  
し

〈一二ウ〉

れいなぎときんばすなはちし  
すようにしてれいなぎときん  
ばすなはちらんすちよくにして  
れいなぎときんばすなはちかうす  
くんししんにあつきときんばす  
なはちたみじんをおこすこきう  
わすれさるときんばすなはち  
たみいやしからず』そうしやま  
いありもんでいしをよんで

(三)

人のまぎにしなんとする時に  
そのいふ事よしくんしの  
たつ  
とぶるところのみちみつよう  
はうをうごかしてこゝにほう  
まんをささくがんしよくをたゞ  
しうしてこゝにしんをちか  
づくしきをいだしてこゝ  
にひはいをさくへんとう  
のこと■はすなはちいうしそん

〈一三オ〉

いわくわかあしをひらけわかてを  
ひらけしにいほくせん／＼けう  
／＼と〇〇てふかきふちにのぞめるが  
ごとくうすきひをふめるがごとし  
けふよりして〇〇さわれまぬ■かん〇〇ぬといふ  
事をしんぬせうし』そうし

(四)

せり』そうしがいわくのうをもつ  
てふのうにとひ多をもつて  
くはにとふあれどもなきがごとくし  
みてれどもむなしきが【か】ごとくし  
おかせ(※)れどもむくひずむかし

(五)

わがどもむかしことにこゝにし【たがへりかつへし?】  
き『そうしがいわくもつて六せき  
のこをつぐべしもつてはくり  
のめいをよすべししたいせつに

(六)

※この「せ」字「き」か

〈一四ウ〉

のぞんでむほうへから【くし】  
くんし人のくんし人なり『そう  
しがいはくしもつてこうぎ  
ならずんばあるべからずじんをも  
ふしてみちとをしじんこれ  
をもつてをのんがんとす又  
をもからずやしんでのちにやむ  
又とをからずや』しのゝたふまくしに  
おこりれいにたちがあくになる『し  
のゝたふまくたみにはもちぬ

(七)

(八)

(九)

〈一五オ〉

しむべししらしむべからず  
『しのゝたふまくようをこのんで  
まづしきをにくむはらん

(一〇)

なり

人としてじんあらざるをにくむ  
事すではな○(ほど)しきはらん也  
『しのゝたふまくもししうこう  
のさいのびありともたとひ  
おこり又やぶさかならば  
そのよは見るに【たら】ざ【ら?】く

(一一)

〈一五ウ〉

のみ『しのゝたふまく三ねん  
まなんでよき【は?】いたらざる  
ときんば  
うべからざらくのみ』しのゝたふまく  
しんにあつうしてかくをこのむ  
しをせんたうにまぼるきはう  
にはいらずらんほうにはおらず  
天かみちあるときんばすなはち  
まみゆみちなきときんばすな  
はちかくるくにみちあるとき【は?】

(一二)

(一三)

〈一六オ〉

まづしくまたいやしきははぢ  
也

くにみちなぎときにとみまた  
たつときははぢ也『しのゝたふま  
くそのくらゐにあらざればそのまつ  
りことをはからず』しのゝたふま  
しゝがくはんしよのらんをはじ  
むるときにやう／＼として  
みゝにみてるかな『しのゝたふまきや  
うにしてちよくならずとう  
にしてげんならずこう／＼

（一六ウ）

としてしんあらずんばわれしら  
ず『しのゝたふまかくもしをよ  
ぶべからずんばなをう〇〇〕なてん  
ことをおそるゝがごとくす』しのゝ  
たふまきぎゝたるかなしゆん  
うの天下をたもてる事し  
かうしてあづからず『しのゝたふ  
まのおほいなるかなぎよう  
のきみたる事ぎゝたるかな

（一四）

（一五）

（一六）

（一七）

（一八）

（一九）

たゞぎようのつとるたう／＼

たるかなたみよくなづくること  
なき事ぎゝたるかなそれ

せいこうある事くはんたるかな  
それぶんしやうある事『しゆん  
しん五じんありしかうして

天下おさまるぶわうのゝたふ  
まく■われらんしうじんあり

（一七ウ）

こうしのゝたふまきさいのかたい  
ことそれしからずやたうぐの  
あひだにこゝにさかんなりとす  
ふじんありきうじんのみ也  
天かを三ぶんしてそのふた  
つをたもつてもつてめん  
にふくしすしうのとくをば  
それしとくといふべ●●●●●（※）  
のみ『しのゝたふまきうをは

（二二）

※「からくのみ」か。川瀬氏は「からく」とせり。

（一七オ）  
たゞ天をおほいなりとす

（一八オ）

われかんぜんする事なし  
いんしよくをうすうしてかうを  
きしんにいたすいふくをあ  
しうしてびをふつへんに  
いたすきうしつをいやしうして  
ちからをこういきにつくす  
うをばわれかんぜんする事  
なし

〈一八九ウ〉

しかんてい九<sup>\*</sup>

しまれにりとときめいゆるし  
じんゆるす『たつかうたうの人の  
いわくおほいなるかなこうしの  
ひろくまなんでなをなすとこ  
ろなきこと』※しきいて【のたまふまく】  
もんでいしにかたつてのたふまく  
われなにをかとれるぎよを  
とれるかしやをとれるわれは

※ 二の「と」の「二」の字存するか存疑。

〈一九才〉

（子罕第九、一）

（二）

ぎよをとれり『しのゝたふまくば  
べんはれいなりいまいとはけん  
なりわれはしうにしたがはん  
しもにはいするはれいなりいま  
かみにはいするはたいなりしう  
にたかへりといへどもわれは  
しも  
にしたがはん』しよつをたつ  
ころとすることなしかならずと  
する事なしかたしとする

（四）

〈一九ウ〉

事なしわれと【あ<sup>+</sup>】るなし  
『しきやうにをそるのたふまく  
ぶんわうすでにぼつしたれ  
ども  
ぶんこゝにあらざれや天まさ  
にこのぶんをほろほさんとせま  
しかばこうしのものこのぶん  
にあづかる事えざらまし  
天いまだこのぶんをほろぼさ  
ざるにきやう人それわれを

（五）

〈二〇オ〉

(奥書)

此の仮名論語は大槻文彦氏の所蔵本を影写せるものなり。」

此の巻の原本はもと綴本なりしを卷子本に改めたるものら

しく毎紙中央に折目あり、左右に余白ありて、左右の端に

近く綴目の孔の見ゆるもあり、卷子本に改むる際」左右の

端を截断したりと覺しく、綴目の孔の半」見ゆるもの又見

えざるものもあれど、中央の折目より」孔までの距離は皆

同一なり。」

巻初の附箋は何れも新し。」

今これを影写するに当り、もとの一紙を一紙に写し、もと」

の折目を折目となして、綴本に改めたり、而して各紙の大」

さは一々之を示さず、たゞその一斑を示さんが為、巻初兩

紙」の輪郭を画ける一紙を巻末に添ふ」

明治四十三年 五月

国語研究室」

〈二二オ〉

〔第三冊〕

〈二オ〉

(朱印)「東京帝国大学図書印」

〈二ウ〉

【論語古写本】

二本ノ内

(貼紙一)

「郷党第十ノ八條目ノ事」

〈二〇ウ〉

(貼紙一終)

〈二一オ〉」〈二一ウ〉

(この一丁に第一紙・第二紙の輪郭を記して料紙の大きさ

の一斑を示せり)

(貼紙二)

「郷党第十ノ八章目ノ半ヨリ終マテ」  
(同篇)

謄写 阪部梁文  
校合 橋本進吉

季氏第十六ノ初章ノ半ヨリ

同章ノ終マデ

子路第十三ノ初ヨリ

九章目ノ半マデ

衛靈公第十五ノ五【條】目ヨリ

十二章マデ

奥書ハ無し

(貼紙ニ終)

〈三オ〉

(本紙上部朱割印)「東京帝国大学図書印」

しとおほしといへどもしよくのきに (郷党第一〇、八)

かたしめずたゞさけははかり

な

けれどもらんを■ぼさず

うるさけいちのほじくから

はず

はじかみをすてずしてくら

ふおほくらはすこうにまつる

とき【に】しよよへにせずまつ

りのしよは三じつ【に】いださず

〈三ウ〉

三じつにいでぬるをばくら

はずしよくするときに物かたり

せずいぬるときにものいはず

そしさいかうくわといへども

【まつる】ときんばかならずさいじよ

たり『せきたゝしからずんは

をらず『きやう人のいんじゆに

じやうしやいでぬるときに

「

(九)  
(一〇)

〈四オ〉

「

こゝにいづきやう人のをに

やらふときにてうふくして

そかにたてり『人を

■

たはうにとふときに〈左傍「に」さいはい

してをくるかうしくすり

ををくれりはいしてうくのたふ

(一一)



きういまたたつせずといつて  
あへてなめず『むまややけ  
まく

(一一二)

めいじてめすときんばかを  
またずしてゆく『太<sup>た</sup>べう  
にいつてことごとにとふ』ほう

(一一四)  
(一一五)

〈四ウ〉

たりしてうよりしりぞひてのた  
ふまく人をやふれりやといつ  
てむまをとはず『きみしよく  
をたまふときんば〇(かならず)せきたゞしう  
してまづなむきみなまくさき「いけ■」をた  
まふときんばかならずじゆく  
して

(一一三)

ゆうしんでよらんところなし  
のたふまくわれにおめて  
せよほうゆうしんのせくりものは※「でよらん」  
しやばといへども  
【ところなし】まつりのしゝに  
あらざればはいせず『いぬる時に  
しせずをとぎにかたちつくらず  
しさいいものを見てはなれ  
たりといへどもかならずへんず

(一一六)

〈五オ〉

にはんへときに君きみさいす  
るときんばまづはんすやま  
いするときにきみ見るときんば  
とうしゆしててうふくをく  
はへてしんをひくきみ

※ 「しん」も抹消されるべき部分か

〈六オ〉

べんしやとこしやとを見ては  
なれたりといへどもかならず

かたちをもつてすけうふく  
のものにしようすふはんのものに  
しようせいせんあるときんば  
かならずいろをへんじて  
たつとくいかづちなりかせふい

〈六ウ〉

てれつたるときんばかならず  
へんず『くるまにのるときに  
かならずたゞしくたつて  
すいとる車くるまのうちにし

てしりへにかへりみずとく

ものいはずみづからゆびさゝず  
『いろのまゝにこれきよすふる

「

〈七オ〉

「

まつてのちにゐるのたふまく

さんりやうのしちときあるかな

ときあるかなころきようす 三たびかひで

たつ

（貼紙「郷党第十終」）

「

（貼紙「季氏第十六ノ初條ノ半」）

（季氏第一六、一）

いへることあり？※

いわくちからをのへてれつにつくあたわ  
さる

ときはやむあやうけれともたもた

すくつかへれともたすけすた

（二七）

※ この一行、紙の継ぎ目のため、行末数字分のみ見ゆ  
（右半分を欠く）

〈七ウ〉

※しんはすなはちまさにつくん

そかのしうをもちいん又なんちかことあや

まてりこちかうよりいてききよく

ひつのうちにわれなはこれたれか

（※<sub>2</sub>）まちそやせんゆふかいはくい（※<sub>3</sub>）

「

それせんゆかたうしてひにちかし

いまとらすんはせ※<sub>4</sub>うせいかならすしそん

のうれいをなしてんこうしのたふまく

きうくんし■かれをにくむほつ

二字分の本文なし。

※1 三字分欠。「すけす」か。

※2 二字分欠。「あや」か。

※3 一字分欠。「ま」か。

※4 この「せ」字存疑。「こ」とあるべきか。

〈八才〉

せすといふをすてゝかならずさらに

ことほをつくるきうきくくにを

□□(※1)ちいゑをたもつ物はすくないこと

をうれへすしてひとしからざる

ことをうれうますしきことを

うれへ【ざれ】<sup>すて</sup>やすからざること

□□(※2)けたし人しきときんはまつ

しきことなしくわするるときんは■

すこしきことなしやすからざると

きんは□□□(※3)それかくのごとくなるゆへに

えんしんふくせざるときんはすなはち

※1 二字分左側欠。「たも」か。

※2 二字分右側欠。

※3 三字分くらい空白。「無傾」「かたぶくことなし?」

〈八ウ〉

ふんとくをおさめてもつてきたすすて

にきたすときんはすなはちやすん

□□(※1)ゆふときうとふうしをたすく

ゑんしん■<sup>ふく</sup>せすせさ(※2)れとも○(き)あた

はすくにふんほうりせきすれとも

まほることおあたはすかんだうをほう

1

たいにうこかきんことを【まわる】<sup>はかる</sup>われおそ

らくはきそんかうれえけ<sup>いの</sup>(※3)せんゆに

□□(※4)らすしてせうしやうのうちにあるらん<sup>こと</sup>(※5)

※1 二字分空白。「いま」か。

※2 この「せさ」存疑。「き」とあるべきか。

※3 この「えけ」誤ならん。「いの」とあるべきか。

※4 解説不能。「あ」とあるべきか。

※5 この「らん」二字「るごと」の上に重書か。

〈九才〉

『こうしのたふまく天下道ある

ときんば

(二)

すなはちれいかくせいはつ天しより

いつてんか道なきときんはずなはち

れいかくせいはつしよこうよりいつしよ

よりいてゝはけたししうせいにしてしにっ

せ(※1)すといふことすくなし

「

十一日実久番

(貼紙)「子路第十三」

(子路第二三、一)

「小書き頭書 四くわんめ

しろていしゆう三

しろまつりことをとふ(※2)まつしてらふせ

しむ

※1 「せ」字右半分欠。

※2 「子曰」二字分本文なし。

〈九ウ〉

えきこうの□□□□(※1)くむ事なかれ■

『□□□□(※2)きうきしのみいとしてまつり

ことせ

(二)

□□(※3)しのゝたふまくゆうしをはさきん

せよ

□□□□(※4)わをゆるしてけんさいをきよ

せよ

いわくいつくんそけんさいをしつて

きよせん■のたふまくなんちの

しれらんところをきよせよなん

ちの

しらす■ところをは人それすて

めや『しろかいわくゑいのきみしを

まつてまつり●(※5)とをせんしまさに

※1 三字分空白。「たふま」とあるべきか。

※2 二字分空白。「ちう」とあるべきか。

※3 二字分空白。「とふ」とあるべきか。

※4 三字分空白。「せうく」とあるべきか。

※5 この一字解説不能。「二」とあるべきか。

〈一〇オ〉

いつれをか□□□□(※1)さきんせんしのゝ

たふまく【いつれ?をかさきんせん】

かならずなたゝしうせんかしろか

いわくこれあるかなしのさかれる(※2)

たり

いつくんそそれたゝしうせん

(三)

しのゝたふまくやなるかなゆふ  
くんしはそのしらさるところ  
におひてけたしけつしよす

※1 三字分ほど空白。本文の欠落は特にないと思われる。

※2 この「さかれる」「たり」存疑。

」

〈一〇ウ〉

「小書き頭書」四の二

なたゝしからさるときんはすなはち  
ことしたかはすことしたかはさる  
ときんは〇すなはちわさならすわさならさる  
ときんはすなはちれいかく  
おこらすれいら(※)くをこらすさる  
ときんはすなわちけいはつ  
あたらすけいはつあたらする  
ときんはすなはちたみしゆ  
そくをおくところなしかるか

※この「ら」字あるいは「か」か。

〈一一オ〉

□□□□□□(※)ゆへにくむしは  
なつくることかならずゆふへくす  
ゆふことかならずおこなふへくす  
くんしはそのことにおひていや  
しんするところなからまくのみ

『はんち【か?】まな(※)ひんとこふしのゝ

(四)

たふまくわれらうのうにし

かすほつくる事まなひんとこふ

しのゝたふまくわれらうほにし

かす

はんちいてぬしのゝたふまくせう

※1 五字分ほどの空白。本文の欠落はなしか。

※2 この「な」字「の」の上に重書か。

〈一二ウ〉

しんなるかなはんすふかみれい

」

「小書き頭書」四の三(※)

をこのむときんはすなはちたみ

あへて

けいせずといふことなしかみぎを

このむとさんはすなわちたみ  
あへてふくせすといふ事なし  
かみしんを〇〇〇のむとさんはすな  
はちたみあへて心もちいすと  
いふ事なしそれかく■のことく

※ この三字存疑。紙の境目でほとんど見えず。白抜き字にて  
書かる。張り合わせた下に見えたものか。

「  
〈二二オ〉

なるときんはすなはちしはう  
のたみその子こをきやうふし

いたる

いつくんそかもちいん『しのゝたふ

まく

しさんはくをせうすさつくるに

まつりことをもつてするときは

たつせすしはうに■つかひ

としてひとりこたふる事

あたわすおほしといへとも

〈二二ウ〉

またなにをもつてかせん  
『しのゝたふまくそのみたゝ  
しき  
ときはれいせされとも〇おこなはるそのみ  
たゝしからさるときんはれいと

「  
〔小書き頭書 四の三〕  
（六）

いへともしたかはす『しのゝたふまくろゑいの  
まつりことはけいていのことし』し

（七）

ゑいのこうしけいをのたふまくよく

しつにをりはしめあるときに

して

【のたふまく】いやしくもあふす

〈二三オ〉

こしきあるときにしていわく

いや

しくもまつたしきかんにある

ときにしていわくいやしきも

よし『しゑいにゆくせんしほくたり

しのゝたふまくもろ／＼あるかな

せんゆうかいわくすてにもろ／＼

あり又なにをかくわゑむのたふ

（九）

まく

すてにとめり又なにかかくわ

えん

のたふまくをしへむ『しのゝたふまく

まことにわれをもちある物こと

あら

(一〇)

〈一四オ〉

その身をたゝしうする事

あははすんは人をたゝしう

せん事いかん『ぜんしてふ

よりしりそくしとゝたふ

まくなんそおそかつつる

(一四)

〈一三ウ〉

はきけつのみにしてかならん三ねん

にしてなすことあらん『しのゝたふま

く

(一一)

せんしんのくにををさむる事はく

かたて

ねんにして又もつてざんに『たち』

さつとすつへしまことなる

かなこと事『〇(このゝたふまく)もしわうしやあら

は

(一二)

一

〇(■がなちま)よう※としてのちにじんあらん『しのゝ

たふまくいやしくもその身を

たゝしうせんまつりことに

したかわんにまおひしてなんかあらん

(一三)

(貼紙)「コレマテ

子路第十三ノ九條目ノ半マテ」

(貼紙)「衛靈公第十五ノ五條目に」

(衛靈公第一五、五)

「小書き頭書」(四の五)(※一)

しちやうおこなわれんことをとふしのゝたふ

まくことちうしんあるかうとつけい

あらははんはくのかくといふとも

おこなわれんことちうしん ■ ■ ■ ■  
■ ■ ■ ■  
■ ■ ■ ■  
■ ■ ■ ■

あらす

※1 この「五」右半分欠。

〈一四ウ〉

かうとつけいあらすんはしうり

といふともおこなはれんやたてる

ときんは

すなはちそのまへにしんせんたるを

み■にあるときんはすなわちその

かうにをるをみるそれしかうしてのちに

をこなわれんしちやうしんにしん(※)す

『○(し)のゝたをまゝくちよくなるかなしきよくにみちあり

とも(六)

やのことしくにみちなけれともやの

ことしくんしなるかなきよはく

きよくくにみちあるときんは○すなはちつかふ

※ この「ん」字存疑。「よ」または「る」であるべきか。

〈一五才〉

くにみちなきときんはすなはちまい

てふところにしつへし『しのゝたふまゝく

ともにいふへくしてともにいわさるは

人をうしなへるなりともにいふ

へからずしてともにいふはことを

うしなへるなりちしやは人をも

うし

なはず又ことをもうしなわす

(七)

「

『しのゝたふまゝくしゝじん』(※はせいを

もとめてもつてじんを【やふ】<sup>はいす</sup>る

こと

なし身をころして○もつてしんをなす

※ この量符満点あり。

〈一五ウ〉

ことあり『しこうじんせんことを

とふしのゝたふまゝくたくみよく

せんと

ほつするときはそのことかならず

まつそのうつわ物をとくすこのくにゝ

いてそのたいふのけんしやら(※)につかへて

そのしをともすせうしん『かぬん

くに【を】おさめんことをとふしのゝたふまゝく

かのときをおこな多いんのろにのれ

しうのてんのはく(※)せよかくはすなはち

※1 この「ら」字衍字、あるいはないか。

※2 この「はく」存疑。三冊目は「ぶく」。

(二〇)

(九)



（一六オ）

せうふをせよ■いせいをはなちめ（※一）い  
じん【を】ざげよていせいはいんなり

め（※二）いしんはあやうし

『しのゝたふまく人として』

とをき

（一一）

をもんはかりなきときはかなら

す

ちかきうれへあり『しのゝたふまく

（一二）

やんぬるかなわれいまたみすとくをこのむ事色を

このむ

かことくする物を

『※三]さうふんちうはそれくらいをぬす

める

（一三）

人か【せい】をはなちめいしんを【

らうかけいか【をしつて】けんなる

事を

しつて

※1 この「め」字存疑。「ね」とあるべきか。

※2 この「め」字「ね」の誤か。

※3 この間「子曰」二字分の本文なし。

（一六ウ）

（一七オ）

（奥書）

此の仮名論語は大槻文彦氏の所蔵本を影写せるものなり。「此の巻の原本はもとより卷子本なりしことは各紙中央に折目なく且一字の両紙にまたかれるものあるにても明なり反古の「裏を持ちゐたる処もありて、紙幅の等しからざるものあるのみ」ならず、その文の甚しく相違せるもあり。

今之を影写するにあたり、初め数葉は一紙を一紙に写すこととを得たれども、その後の部分は然すること能はず。故に縦一線を画きて以て紙幅を示せり紙の高さは縦線の長さを以て「示し横線を画かず但両紙の長短の差甚しきものは、短き」横線を以て之を示せり。原本の一紙を一紙に写せる部分に「於て、一字両紙に亘れるものあるときは影写本に於ては一紙に」その全形を写し、他紙のこの文字あるべき部分は双鉤を以て之を「示せり。又紙幅の文字の他の紙の為に覆はれて隠れたる部分は」

（一七ウ）

また双鉤を以てせり」

明治四十三年五月

国語研究室

〈一八才〉

謄写 阪部梁文

校合 橋本進吉

〈一八ウ〉

(付記) 第二分冊の翻刻、および本資料の詳しい解題等については、後日に期したい。貴重な文献の翻刻をご許可くださった研究室に、厚くお礼申し上げます。

(やなぎはら えつこ 大学院人文社会系研究科 助教)